

平成二十九年（二〇一七）三月二十五日発行
『大倉山論集』 第六十三輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

松下幸之助と神道大系の編纂

三
橋
健

松下幸之助と神道大系の編纂

三橋 健

目次

はじめに

一 松下幸之助翁の憂国の思想

二 松下幸之助翁と西田長男先生の会見

三 松下幸之助翁と西田長男先生の会見の場を設定し

た西島一郎君のこと

四 神道大系編纂会設立までの準備期間

五 松下幸之助翁のもう一つの願い

六 国民精神文化研究所の「神道大系」の編纂・刊行

計画

おわりに

はじめに

平成二十七年の十一月中頃、國學院大學の西岡和彦教授から、大倉精神文化研究所では「実業家の社会貢献とその理念」というテーマで連続講演会の企画をされており、そのなかで「松下幸之助と神道大系の編纂」という表題で話すようにとの依頼を受けました。私は適任者でないので即座に固辞いたしたのですが、その後まもなくして平井誠二研究室長から再三のご依頼があり、その粘り強さに負け、つい引き受けてしまいました。「後悔先に立たず」とはこのことをいうのだと思ひながら壇上に立つております。

さて、何をどのように話そうかと、あれこれと悩んでいたところ、大学の図書館で『(財)神道大系編纂会 記念誌』(神道大系編纂会編、平成二十年九月二十七日、以下『記念誌』と略称)を閲覧する機会がありました。それを紐解いてみると、そこに会長の松下幸之助翁の「日本古来の伝統精神を求めて」(○この題名は宣伝のために作成されたパンフレットによる)という文章が目にとまりました。これは『神道大系月報』(1)(昭和五十二年十二月)に掲載した「刊行のことば」の転載であります。改めて読み返してみますと、当時、松下翁が、どのような考えやお気持ちで神道大系の完遂を望んでおられたか、つまり松下翁の神道大系編纂、刊行の発意が伝わってまいります。だから、この文章は、本日、私に与えられたテーマの根本資料となるものですので、資料(1)に全文を掲げておきます。これに基づきながら話を進めていきたいと考えています。なお、この文章をお書きになった時、松下翁は八十歳でありました。そのことを心に留めておいていただきたいのです。

資料(1)の要旨をまとめてみると、——戦後三十余年、日本は経済的復興をなしとげたが、精神的復興は世界の師表となっていない。その要因は日本人の精神的基盤が喪失したところにある。日本が世界に貢献するには、先人が

創造してきた精神的遺産、なかでも日本人固有の精神的所産であり、日本人の魂の原点がひそんでいる神道を見直すことが大切だ。仏教には『大藏経』、道教には『道蔵』がある。しかし神道には永遠に残る研究著作の大集成がなされてこなかった。かつて政府事業として「神道大系」の編纂、刊行の計画はあったが、敗戦の混乱により中断した。このたび、かつての計画案に多少の修訂を加え、また時代の進運にも適合するようにして、ここに民間有志の手による「神道大系」の編纂、刊行を発意した。その趣旨は喪失していく日本人の精神的基盤を、このまま放置しておいたのでは、日本の将来が危ういと憂慮するからである。——となります。

ただ、「刊行のことば」のなかの「かつて文部省においては、政府事業として、国民精神文化研究所に『神道大系』の編纂、刊行を計画させていた」とあり、また「さきの政府事業による計画案」のところは、それを具体的に示さないと、皆さんには「それに多少の修訂を加え、時代の進運にも適合するようにした」との部分もご理解いただけないと思います。これについては最後にまとめて述べることにいたします。

一 松下幸之助翁の憂国の思想

話は前後して恐縮ですが、松下翁は「経営の神様」と尊称され、経済面で高く評価されておりましたが、昭和四十八年、七十八歳の時、第一線を退かれ、晩年はもっぱら日本人の精神面へと視点が向けられていきます。

松下翁が従業員に「松下電器は何をつくるどころかと尋ねられたら、松下電器は人をつくるどころでございます。併せて電気器具もつくっております、こうお答えしなさい」という有名な話があります。このように人間形成が大切であり、人の心が豊かにならないと、日本は真の世界の師表となることができないとお考えなのです。

神道大系の編纂、刊行も、その一環と見られますが、その前に触れておきたいのは、昭和四十九年十二月、七十九

歳の時に発刊した『崩れゆく日本をどう救うか』（PHP研究所）という憂国の書であります。この書は当時六十歳万部を超えるベストセラーになりました。私はこの書をご恵贈賜り、恐縮いたしました。この書を読んでみますと、松下翁の神道大系編纂、刊行の趣意がどこにあったのかを、より深く理解できました。例えば、「まえがき」に、次のように書いておられます。

最近の世情を見てみると、このままでは日本はゆきづまってしまおうのではないかという気がしてならない。というより、もうそのことは火を見るより明らかだという感じさえする。ひとり私だけでなく、多くの人がしだいにそういう感じを持ちつつあるようである。みんなだんだんと心配してきたようだし、中にはうるたえる人も出始めている。（中略）だから、このままではいけない。いまのままです手をこまねいていけば、お互いに破滅してしまふはかはない。なんとかこの難局を切りぬけて、そこからよりよい日本をつくりあげていかななくてはならないと思う。

この「まえがき」からも晩年の松下翁が国の現状や将来に心を痛めておられたことは明白です。そのようななかで神道大系編纂会が発足したことを留意しておきたいのです。また、「心配なのは政治でんな」と言われ、経済を支えている政治は「よほど思い切ったことをやらしてもらわんとあきまへん」ということで、昭和五十四年一月、八十四歳の時、松下政経塾を開塾いたしました。十年間の構想の末、私財七十億円を投じて設立されたもので、政界にも貢献しようとの意思の表れであります。

その「設立趣意書」のなかで、心を惹かれますのは「この政経塾においては、有為の青年たちが、人間とは何か、天地自然の理とは何か、日本の伝統精神とは何かなど、基本的な命題を考察、研究し」云々と記すところです。ここにいう「天地自然の理」「日本の伝統精神」とは、日本の伝統的な民族宗教である神道のことと解されるからです。

恐らく松下翁は憂国の思想をお亡くなりになるまで持ち続けられたと思います。九十歳になられたとき、日本経済新聞社の記者の河村有弘氏のインタビューに答えられて「確かに、これからはモノだけではあきまへんな。心が豊かでおまへんと」と語られ、最後に「言い残しましたが、これからは『日本人とはなにか』をもっと考えねばあきまへん」と述べておられます。（詳しくは、日本経済新聞、昭和五十九年一月九日、夕刊一ページの「神サマは90歳、なお21世紀を憂う松下幸之助―心配なのは政治でんな―日本の百人―」を参照）

そういう松下翁でしたが、平成元年四月二十七日午前十時六分に気管支肺炎のため、大阪府守口市の松下記念病院で死去されました。法名は光雲院釋眞幸。享年九十四歳でありました。

このように述べてみますと、松下翁が神道大系を編纂、刊行された発意の根底には憂国の思想があったものと考えられます。神道大系編纂会が発足したのは、後で詳しく述べますように、昭和五十年十一月十三日であり、それは『崩れゆく日本をどう救うか』という憂国の書が発刊された翌年にあたります。松下翁は明治二十七年十一月二十七日のお生まれですから、その二週間後に満八十歳の誕生日を迎えられました。

二 松下幸之助翁と西田長男先生の会見

続いて神道大系編纂会設立に至るまでの経緯を述べておくことにいたします。その辺のことを『記念誌』は詳しく伝えていません。ただ、編輯を担当していた大野健雄常務理事が「神道大系百二十巻刊行経過報告」のなかで

あの夢と消えた「神道大系」を再興し完成したいと云う気運が自ら醸成され、これを実現すべく勇敢に立上り、行動に移されたのが西田長男博士（当時、國學院大學教授）である。伝手を介して松下幸之助翁にお目に掛り、この事業の国家的学問的価値を力説せられた模様である。

と記しています。確かに大野氏のいわれる通りでして、西田長男博士と松下幸之助翁の会見がなかったなら、神道大系の編纂、刊行はなかったといっても過言ではありません。

したがって、ここで西田博士の略歴を知っておくことは、今後の話を理解する上で都合が良いと思いますので、大倉精神文化研究所との関係を意識しながら、簡単に紹介してみたいと思います。

西田博士は私の恩師ですので、これからは、単に「先生」と呼ばせていただきます。先生は明治四十二年三月三十一日、松阪市でお生まれになり、昭和七年三月、國學院大學神道部を卒業、四月、道義学科倫理科に入学し、神道学を専攻、この頃より宮地直一博士のご指導を受けたようです。

次いで同十年三月、道義学科倫理科を卒業すると、引き続き同学研究科に入学、翌十一年三月、卒業し、直ちに大倉精神文化研究所に入所され、神典解説係助手を委嘱されます。ただし、研究所では来る日も来る日も草取りなどの清掃が主な仕事であり、入所して一カ月ぐらいはまったく机に向かうことがなく、大倉邦彦所長は「草取りが神道だ」と教えられたそうです。

このことは先生から繰り返し聞き返されました。当時、私は東京練馬の某神社の宮守をしながら神道の勉強をしておりました。どちらかといえば、神社の清掃に明け暮れの毎日でしたので、このお言葉に私は深い感銘を受けました。

このような大倉翁の生き方は松下翁とも共通するところがあります。先生が亡くなられた二年後、NHK教育テレビで放映された先生との対談集『神々の原影』（昭和五十八年九月、平河出版社）を出版しました。その時、松下翁は拙著に対し「神道を見直すために」という推薦文を寄せてくださいました。そのなかに「神道は古来より日本人の思想や宗教意識を培ってきたのであり、われわれの日常の何気ない行動一つをみても、深く神道に根ざしていることがわかります」と述べておられます。したがって、草取りという行動も深く神道に根ざしたものであるということに

なりません。

話は横道にそれましたが、再び先生の略歴へ戻りますと、昭和十七年四月七日、大倉所長の仰せにより明治神道史研究会設立を起案しておられます。一方、この年、國學院大學講師になられ、また国民精神文化研究所の嘱託として『神道大系』の編纂に携わりました。これについては後述いたします。

翌十八年七月、『大倉精神文化研究所紀要第四冊 神道論』を刊行いたします。ただし先生は当書の内容に満足されていなかったようで、昭和五十二年四月、先生の著作選集を出すことになったとき「当書は入れないでほしい」といわれました。

さて、同じ年の九月、研究所の大日本精神史神道部門の研究嘱託が任期満了ということで解嘱されています（同年十月二十五日の研究所から西田長男殿宛ての文書）。なお、同日、研究所から宮地直一殿宛ての文書には「豫てより御指導を蒙居候嘱託西田長男君の件に就き、本所専属の所員に復帰して精神史編修に専心致す様交渉致處、同君目下本所以外の他の關係を整理致難き故、本所の嘱託を辞する旨の申出有之候」と見えます。つまり「他の關係を整理致難き故」、この研究所を解嘱されたことがわかります。

このように昭和十一年四月から同十八年九月まで、先生はこの研究所に研究員として勤務されておられました。當時の研究所には西義雄、古田紹欽、西順蔵、阿部隆一、秋山大ら、幾多の俊秀がおられ、互いに学問的交流があったようです。なかでも秋山大氏からの影響は大きかったのであり、そのことを先生は『日本神道史研究』第二巻の冒頭の「古代編（上）のために」のなかで

わたくしは、学窓を出て、直ちに大倉精神文化研究所に入所した。そこには秋山大氏のりしという日本仏教美術史專攻の俊秀がいた。彼は司馬遼太郎の大作『坂の上の雲』のモデルの一人の秋山真之提督のりしの長男で、伯父には、や

はり、そのモデルの一人の秋山好古將軍がいた。また、この小説には彼のこともいくらか出てくるのである。そうゆう血統もあるのであろう、わたしは彼ほど頭脳明晰な人はいまだかつて接したことがないように思う。わたくしは、彼からいろいろと大和の古仏についての専門的な知識や見方などを教えられた。わたくしのこの『日本宗教の発生序説』の二編²は、もしも彼の親切な指導がなかったならば、とうてい、ものにはならなかったであろう。(五〜六頁)

と記しておられます³。

このように、先生は「神道」よりも「日本宗教」という語を用いる場合が多かったように思います。つまり神道を日本宗教史の潮流のなかで理解しようとなさったのであり、これも秋山氏の影響であったと思います。

前述したように、先生は昭和十八年九月、この研究所を解嘱いたしますが、戦後には再び研究所との関係を深めます。それを整理してみますと、研究所理事（昭和二十七年〜同三十一年）、研究所研究員（昭和二十八年〜同三十六年）、大倉山学院指導員（昭和二十八年〜）、研究所評議員（昭和四十九年〜同五十五年）となります。なかでも大倉山学院が設置されますと、中村元をはじめ水野弘元、古田紹欽、西順蔵の諸氏に続き、指導員となりました。この間、学問の方法論で特に影響をうけたのは中村元博士であり、そのことを直接先生から聞きました。

また昭和二十七年に『大倉山論集』が創刊されると、論文を発表され、その後も2・3・4・6・8号と毎号のように論文を寄せておられます。さらに同二十九年に『大倉山学院紀要』の第1号が刊行され、そこにも論文を寄せられ、2・3号と続けて論文を掲載されておられます⁴。

再び、話は昭和十八年十月二十五日に戻りますが、この日、研究所から宮地直一殿宛の文書に、「同（西田長男）君目下本所以外の他の関係を整理致難き故」とあるのは、翌十九年四月、先生が東京帝国大学文学部講師になられる

ことをいったものと思われます。先生は東大で神道演習を担当されます。これは昭和十三年三月に先生の師である宮地直一博士が神道講座の初代専任教授として担当されたその講座を委嘱せられたものであります。しかし、この神道講座は同二十一年三月、進駐軍の命令によって廃講となりました。

ちなみに、当時、東大で先生の神道演習に出ていた岡本準水氏は、授業時間割には「神道演習・西田長男」とありましたが講義形式であり、とは言っても、普通という講義というものではなく、対象は古事記であり、詳細をきわめた内容で、情熱の講義は先生の魂の叫びではなかったかと思いましたがと記しておられます。

なお、この後、昭和二十九年四月から同三十三年三月まで、國學院大學講師。同三十年八月、「日本宗教思想史の發生に関する一試論」で文学博士の学位を授与。同三十二年六月、『日本宗教思想史の研究』（理想社）及び『日本古典の史的研究』（理想社）の研究業績により三矢博士記念賞を授与。同三十三年三月、國學院大學大学院に神道学専攻博士課程増設に際し、大学院及び大学文学部の教授となります。

私ごとで恐縮ですが、私が大学院に入学したのは昭和三十七年四月であり、そこで先生に初めてお目にかかり、生涯の師と仰ぐことになりました。以来、お亡くなりになるまで、四十年間、学問のご指導だけでなく、身の上のことまでもいろいろとお世話になりました。文字どおり不肖の弟子であります。

先生は昭和四十五年四月から九月まで、大学から在外研究員として英・仏・独へ派遣されます。これが機縁となり、翌四十六年六月、先生は私にポルトガル国のコインブラ大学へ遊学するようにとの厳命をくだされました。

ここに問題としている松下翁が会長である財団法人神道大系編纂会の専務理事になられたのは昭和五十年十一月のことであり、以後、五十六年三月にお亡くなりになるまで、先生は神道大系の編纂と刊行のために献身されました。

その間で特記されるのは、同五十三年三月から翌五十四年五月まで、著作集『日本神道史研究』全十巻の原稿の整

理・補訂・加筆・校正にとめられたことです。

同五十四年三月、先生は定年により國學院大學を退職、翌月、同大学より名誉教授の称号が授与され、同十一月、勲四等旭日小綬章を受領されました。

同五十六年三月二十八日午前八時、脳溢血により急逝、享年七十二歳でした。葬儀は三十一日、朝から冷たい雨が降りしきるなか玉川学園の自宅で神式にて行われました。その日は奇しくも先生の七十二歳の誕生日でありました。遺言により、遺骨は松阪市小阿坂町山見の西田家観音堂の敷地にある累代の墓地内に埋葬。戒名は「慎学院天長明道居士」。参り墓は松阪市小阿坂町の曹洞宗の千田寺にあります。

三 松下幸之助翁と西田長男先生の会見の場を設定した西島一郎君のこと

前掲した大野氏の文章で気にかかるのは、先生が「伝手を介して松下幸之助翁にお目に掛り」と記すところです。その「伝手」とは誰であるかを聞いておきたかったのですが、大野氏は平成二十年三月二十五日に死去されました。

ここで問題は、そもそも誰が神道大系の編纂、刊行の企画を松下翁に持ち掛け、先生との会見の場を設定したかです。これについては鎌田純一氏が「続神道大系について」のなかで「西田博士のもとで更に具体的に（○神道大系の）計画を進めるうちに、西島一郎氏より松下幸之助氏にこの企画が伝えられた」と記しておられます。

鎌田氏は大倉精神文化研究所の創立者大倉邦彦翁とも深く交流され、所長あるいは図書館長として研究所の発展に尽力された有名な神道学者・歴史学者であります。永年にわたり皇學館大学の教壇にたたれ、同大学名誉教授、また宮内庁侍従職御用掛として活躍されました。

その鎌田氏が記しておられる通り、神道大系のことを松下翁に持ち掛け、先生との会見の場を設定したのは西島一

郎君であります（○以下に、私が友人・後輩を君付けて呼ぶのは、当時の雰囲気そのまま伝えたいからなのです）。そのことは先生ご自身が「わたくしの半生」の「昭和十七年（一九四二）四月、三十三歳」のところで明記されておられます。すなわち

國學院大學講師となる。このころ国民精神文化研究所囑託となつて、政府事業による『神道大系』の編纂に預かったが、それは敗戦によつて頓挫してしまつた。しかるに、はからずも松下幸之助氏の御配慮により、昭和五十二年（一九七七）三月、財団法人神道大系編纂会が設立（○ただし発足したのは昭和五十年（一九七五）十一月十三日である）せられ、民間事業として、これを継続・完成することとなつた。わたしも不能をもちえりみず、専務理事として、この大事業の推進に参画しているのである。「世紀の名著」といわれる神道大系は日を追つて出版されている。松下幸之助氏への橋渡し役としてお願いし、その原動力となつた西島一郎君なくしては、神道大系はあり得ないのである。心から感謝してゐる。⁷¹と記しています。

ただし、皆さんの中には西島君をご存知でない方も多いため、簡単に彼の略歴を紹介しておきます。

西島一郎君は、昭和十六年十一月十九日に西島好夫の長男として大連で生まれ、三重県立伊勢高等学校を卒業し、國學院大學文学部神道学科に入学、卒業後は同大学院文学研究科神道学専攻修士、さらに博士課程へと進み、そこを修了すると、総理府事務官、宮内庁掌典職に勤務し、その一方で國學院大學講師もつとめました。昭和五十年から五十七年まで、伊勢神宮に奉職、神宮教学司となり、平成二十五年十月二十五日、七十二歳で死去しました。

蛇足ですが、昭和五十八年四月、西島君は三重県議会議員に立候補しました。そこで私も伊勢市駅前で彼の応援演説を行いました。残念ながら落選でした。実はこの年の元旦に西島君は私家版の『随想 恵まれたふれあい』を刊

行しました。これは有権者に対して自己アピールのために出したもので、一般の図書館などには入っていないと思います。そのなかに彼と松下翁との交流を書いています。「神道大系」と「偉大なひと」の章ですが、なかでも「神道大系」には松下翁と西田先生との会見の場を設定した経緯が詳記されています。今日のテーマにとって重要ですので、資料(2)に全文を掲げておきます。

読んでいただくと明らかのように、今日は西島君に話してもらったのが良かったのです。しかし、さきほど申したように、彼は亡くなってしまいました。また『記念誌』には、この辺のことを書いてないので、西島君の名誉のためにもと思い、私はピンチヒッターを引き受けることにいたしました。

ところで、この西島君の文章には、残念ながら先生と松下翁の会見が、いつ、何処で行われたかを記しておりません。恐らく昭和五十年の四月か五月に大阪府門真市の松下電器産業株式会社で行われたものと推測されます。西島君はその場に立ち会っていたのですから、その辺のことを詳しく彼から聞いて書きとどめておくべきでした。

これに関し、当時、先生の研究室（神道第一研究室）に勤務していた岡田荘司君が

わたしが國學院大學へ戻った昭和五十年五月のある日、渋谷・常盤松校舎の研究室（現在その建物は壊され、新しい図書館・神道資料館を建設中）で、西田長男博士は機嫌よく、これからの神道の編纂事業の構想を述べられた。

「戦前、宮地直一先生が国家事業として計画された神道大系は戦争の悪化によって頓挫した。この企画がようやく松下はんの賛同・後ろ盾をいただき発足することになった」

「松下はん」とは、経営の神様松下幸之助翁。西田博士は三重県松阪出身であったので、関西弁が混じり、このように呼ばれていた。西田博士は松下翁に直接お目にかかり説得されたという。

と書いていますから、私の推測は全くの的外れでないと思います。

四 神道大系編纂会設立までの準備期間

神道大系編纂会は昭和五十年十一月十三日に発足することが決定いたしました。それまでの準備期間は半年もありません。その間に「神道大系編纂刊行計画案」を作成しなければなりません。どのような書目を収めるかを選定し、どなたに編纂を担当していただくか、つまり編纂委員の候補者を出してその方の承諾を得る必要があります。また執筆要綱の作成、監修者のことなど、多忙な日々でありました。

まず、必要なのは所収書目の選定でした。そのために昭和五十年の夏は休暇もなく、猛暑の中を先生の家で会議をいたしました。そこに集まったのは、先生から教えを受けていた中地丈夫・西島一郎・松宮兼房・小林一成・鈴鹿千代乃・相（宮下）千恵子・岡田莊司の諸君、そして私も参加しました。何しろ、私どもはまだ若かったので、書目の選定は任の重い仕事でした。私どもの智恵だけでは十分でないのです、私は長年にわたり東大の史料編纂所に勤務され、当時、国士館大学教授であった村田正志博士のご見解を伺うため、お宅を訪れたものでした。今後の参考のため、村田博士の構想案を資料（3）に掲げておきます。

そのようななかで、岡田君は先生のご指示にしたがいながら「神道大系編纂計画案」（八枚）を作成してくれました。この原案となったのは、東京が大空襲で焦土と化した昭和二十年三月に教学錬成所調査部が編纂した「神道大系所収参考書目集」であります。ただ、あれから三十年の月日が経っていましたので、私どもは時代の機運に適合するように心がけ、また修訂もいたしました。そして作成したのは、全百四十一巻から成る「神道大系編纂刊行計画案」でした。その編成は【一】首篇 全三巻・【二】古典篇 全十巻・【三】朝儀祭祀篇 全五巻・【四】神宮篇 全五巻・【五】

神社篇 全五十六卷・【六】註釈篇 全十卷・【七】祭祀行事篇 全五卷・【八】論説編 全四十二卷・【九】文学編 全三卷・【十】法制篇 全三卷というものでした。

しかし、実際に刊行されたのは全百二十巻であり、それは【一】首篇 全四巻・【二】古典篇 全十三巻・【三】古典註釈篇 全八巻・【四】朝儀祭祀篇 全五巻・【五】神宮篇 全五巻・【六】神社篇 全五十二巻・【七】論説編 全二十八巻・【八】文学編 全五巻から成っています。つまり、私どもが作成した「計画案」の【七】祭祀行事篇(五巻)と【十】法制篇(三巻)が削除されています。

研究部長の平井誠二さんは『神道大系』全百二十巻を、わざわざ図書館から運ばれて、このように壇の上に並べられ、講演に花を添えて下さいました。ありがとうございます。どうぞ後で実際に手にとって閲覧ください。また、私どもの作成した「計画案」を資料(4)に示しておきました。もとより未熟なものですが、若かった頃の記念的なものなので、そのまま掲げておきました。

さて、書目選定が終わり、次に各巻担当の編纂委員(校注者)を依頼することになりました。これが思ったより難儀でした。九月に入り、先生のご指示に従い、それぞれが編纂会発足に向けて活動いたしました。なかでも岡田君は校注者の履歴などを記入する用紙の作成、雑務の整理などと、ご苦労も多かったと思います。私も微力ながら編集顧問・編纂委員の依頼のため東奔西走の日々を送りました。

先生は依頼がスムーズに進行するようにと、東京班四十五人・京都班十八人・伊勢班十八人と分けられ、各班に責任者を置き、特に編集顧問の依頼は私がするようにとのことでした。若輩者でありましたので、さまざまな忠告をいただきながら、三人の編集顧問と五十名の編纂委員を選定することができました。この間のことを当時の私の日記には細記してありますが、それらを述べる時間はありません。ただ、今後、神道大系の編纂・刊行を進めていくには岡

田君のような真摯な学徒が適任であることを先生に進言したことがあります。

次いで神道大系の事務所は大阪市南区二ツ井戸町十三番地M I D内に設置されました。松下電器の社会業務本部長山本増雄氏が事務局長となり、事務的なことは私どもの手を離れました。

昭和五十年十月三十一日、神道大系編纂会発起人代表の芦原義重・中山素平・松下幸之助から編集顧問と五十名の編纂委員宛に神道大系編纂会設立の案内状が出され、私も編纂委員の一人に加えられていましたので、その書簡を拝受いたしました。そこには神道大系編纂委員として協力願いたい旨、あわせて編纂計画ならびに今後の進め方について編纂会役員との懇談をいたしたいことなどが書かれていました。日時は同年十一月十三日(木)の十二時三十分から十四時三十分まで、場所は東京のホテル・オークラ本館一階の平安の間でありました。

その前日のこと、山本事務局長から「編纂委員の先生方のお顔を存じ上げないので、当日、受付の一員に加わっていただきたい」との依頼がありましたので、当日、私は受付に専心いたしました。この日、松下会長から五十名の神道大系編纂委員に委嘱状とともに「神道大系編纂会設立趣意書」〔資料(5)〕が渡されました。

神道大系編纂会が発足すると、間もなく松下会長のもとで顧問に伊勢神宮大宮司・神社本庁統理の徳川宗敬氏、参与に伊勢神宮崇敬会副会長・理事長の慶光院俊氏、神社本庁事務総長・熱田神宮宮司の篠田康雄氏、明治神宮宮司の伊達巽氏、そして副会長に坂本太郎先生、常務理事に西田先生、以下、理事が五人、監事が二人、幹事が三人と決定し、編纂会の組織が形成されました。

やがて真壁俊信君が編集主任(後に常務理事)となりました。真壁君とは学生時代から國學院大學神道史学会の活動を通して互いに交流した仲でした。また天神信仰の研究会で互いに切磋琢磨いたしました。彼は坂本先生・西田先生のご指導を受け、両先生から深く信頼されてきました。東北人特有の粘り強さと学問に対する真摯な態度に、彼は

私の後輩ですが、ひそかに敬意を表してきました。真壁君は間違いなく神道大系の編纂、刊行に関して最も良く知っている一人であります。

ところで、神道大系編纂会が発足して半年後の昭和五十一年四月十五日のことでした。西田先生から書簡が届きました。その内容は、——四月二十九日に大阪の松下電器本社で理事会が開かれる。その席上において松下会長に各巻の進歩状況を報告しなければならぬ。私が強く催促すると悪いので、貴君が各編纂委員に二十六日(月)までに電話をして聞いて欲しい。伊勢班の方は西島君がまとめる。来年の四月中に第一巻を刊行、その後、毎月一巻の予定で刊行する。今年中に財団法人に認可、また近く研究所ができる予定。——とありました。前に述べましたように、神道大系編纂会が文部省所管の財団法人として認可されたのは翌五十二年三月のことです。

五 松下幸之助翁のもう一つの願い

昭和五十二年十二月、古典篇の『古事記』(校注者・小野田光雄)が刊行されました。待ちに待った最初の配本でした。その「月報」に松下翁は「刊行のことば」を掲載されました。これに関しては冒頭で述べ、その全文を資料(1)として掲げておきました。

その後、間もなくのことだったと記憶いたします。私は、当時PHIP研究所に勤務し、松下翁の秘書もされていた江口克彦氏と西島君の二人(〇ともに神道大系編纂会の幹事)から相談を持ち込まれ、三人で新橋の某ホテルで夜遅くまで語り合ったことがあります。そのとき、江口氏は「松下さんは、神道学界や神社関係者の専門書も結構だが、わたくしのような学歴のない者(〇松下翁は尋常小学校を四年で中退し、九歳で丁稚奉公に出され、十八歳のとき、関西商工学校夜間部予科に入学したという)にもわかるような神道書、また神道の知識のない一般国民にも理解でき

る神道教養叢書を願われている。西田先生とご相談して案を立ててほしい」といわれました。

当時、松下翁は全国氏子総代会会長でもありましたので、一日も早く氏子にもわかる神道教養叢書を願望されていたのです。実は、そのことは「神道大系編纂会設立趣意書」にも次のように明記してあります。すなわち「一般国民に神道のみならず、日本古来の伝統精神と文化を、親しみやすく、より理解されることの必要性を痛感いたします。一年乃至二年後には一般教養書『神道教養叢書』全五巻も併せて刊行する」とあり、「神道大系編纂会の目的」(2)にも「神道教養叢書の刊行」とみえています。さらに発足の日にいただいた「神道大系編纂会寄附行為」第2章「目的」第3条にも「一般国民に平易に理解できる叢書を発行し、日本精神文化の振興に寄与する」とあり、「事業」第4条にも「(2)神道教養叢書の刊行」を掲げています。しかし、その時、編纂会が発足して三年を経っていましたが、「神道教養叢書」は、まったく放置されたままでした。

早速、私は先生に江口氏から聞いた「松下翁のもう一つの願い」を伝えたところ、先生もかなり気にされ、「松下さんは全国氏子総代会の会長でもあるから、『氏子必携・氏子教養叢書』のようなものはどうか」といわれました。私は「神道入門講座」全五巻が良いのではと愚案を申し述べました。「要は民衆の立場を忘れないこと。日本の神・日本の道、そして神社・祭りがキーワードになる」ということで、私は当時、町田市にお住まいになっておられた原田敏明先生のお宅をたずねてご見解を伺いました。あれこれ互いに熟考を重ねた結果、次のような内容の新書判を計画いたし、各項目の執筆者も選定してPHIP研究所に提出しました。しかし、内容が難解なこと、執筆者の多くが無名であるとの理由で受けいれられませんでした。

ただ、今後の参考までに、どのような内容のものを提出したのか、その目次を掲げておきます。各項目の執筆者は省略してあります。

原田敏明・西田長男編「神道講座」全五巻 新書判 各巻二百頁

第一巻 日本の神・日本の道

序説・日本の神・日本の道

第二巻 日本の祭り

日本の祭り・祭りの形而上学・祭りと共同社会・祓と禊・祝詞の思想・祭りと日本神話・大嘗祭・さまざまな祭り

第三巻 神社

神社の成立・氏神と氏子・宮座・本地垂迹説の展開・宮寺という神仏習合の神社・修験持ちの神社・郷村の神社・都会の神社

第四巻 信仰の諸形態

大神宮信仰・八幡信仰・天神信仰・熊野信仰・祇園信仰・稲荷信仰・山嶽信仰・御霊信仰・東照宮信仰・明治神宮

第五巻 偉大なる人びと

一遍・吉田兼俱・北畠親房・山崎闇斎・山鹿素行・本居宣長・慈雲尊者飲光・二宮尊徳・黒住宗忠

また、各巻末には付録として神道美術・民俗芸能などの写真を掲げて解説する予定でした。

しかしながら、神道教養叢書の刊行を果たすことなく、昭和五十六年三月、先生は急逝いたしました。先生亡き後も、私の心中から神道教養叢書のことは消えることがありませんでした。そこで思い出したのは、五十二年から五十二年にかけてNHK教育テレビの「宗教の時間」で五回にわたって先生と対談したことでした。それを『神々の原影』

と題して出版し、松下翁に献上すると、たいそうよろこばれ、「神道を見直すために」という推薦文を寄せて下さいました。松下翁が神道を適切にやさしく解説した本を望まれていたかを知ることができそうですので、全文を掲げておくことにいたします。

「神道を見直すために」

神道は古来より日本人の思想や宗教意識を培ってきたものであり、われわれの日常の何気ない行動一つをみても、深く神道に根ざしていることがわかります。

今回の、この西田先生と三橋先生の対談は、西田神道学を浮き彫りにするだけでなく、従来の神道および神の考え方について見直しを促すような、新しい意見が随所にみられるようです。

私がかねがね、神道を適切にやさしく解説した本を、全国の多くの人たちに読んでいただきたいと考えていました。この本が、その機縁となればと念じている次第です。

松下電器産業株式会社相談役 松下幸之助

一方、某新聞の社説などから『神々の原影』は「害毒を流す何物でもない」との厳しいご批判もいただきました。さらに私事になり恐縮ですが、平成七年二月、六十七歳の時、スキルス性胃がんが発見され、医師から一刻も早く手術しないと余命三ヶ月と宣告されました。その時、ふと松下翁のもう一つの願いのことが思い出されました。松下翁がご存命の時に果たせなかつたので、私なりの神道教養書を書いて死にたいと思いました。そしてほとんど参考文献などを見ないで、ベットの上でなぐり書きしたのが『神道の常識がわかる小事典』（PHP研究所、平成十九年）と『神社の由来がわかる小事典』（同上）でした。幸いPHP研究所の江口克彦氏が引き受けて下さり、PHP新書として出版することができました。これらに対しても、「間違いの多い廉価本だ」との批判がありました。

神道を適切にやさしく解説することは、容易でなく、浅学非才な私には無理であり、それは神道を知り尽した偉大な神道学者によつてはじめて成し得るのだと知りました。

すでに述べましたように、神道大系編纂会は昭和五十年十一月に設立し、二年後の五十二年三月に財団法人として認可され、以後三十余年の長きにわたり、神道に関わる膨大な文献資料を体系的に集大成し、刊行してきましたが、平成二十年十一月二十八日に解散いたしました。この日は松下翁がご存命であれば、百四歳の誕生日の翌日ということになります。

そこで忌憚のない私見をいわせていただくならば、解散をする前に、編纂会が目的の(2)として掲げている「神道教養叢書の編集刊行」にも肩入れをして欲しかったこととあります。松下翁は、かねがね、神道を適切にやさしく解説した本を全国の多くの人たちに読んでいただきたいと考えていたのであり、そのことを切望されておられたからであります。

ちなみに、前述した鎌田純一氏も、私と同じお考えであったようで、神道大系百二十巻の刊行が完結したあとで「これですべて終えられたか。編纂会は解散か、それではさみしいと財団法人神道大系編纂会の寄付行為を改めてみたが、その第五条(○鎌田氏のみられた「寄付行為」は財団法人として認可され一部変更されたもの)事業に、(1)大系の編纂刊行の他に、(2)神道教養叢書の編集刊行、(3)神道文化の調査研究等が挙げられている。それで或いはその(2)あたりを進められるかと思っていたら、統神道大系の広告を出された。」⁹⁾と記しておられます。

六 国民精神文化研究所の「神道大系」の編纂・刊行計画

松下翁が「刊行のことば」のなかで「かつて文部省においては、政府事業として、国民精神文化研究所(○昭和七

年に設置)に『神道大系』の編纂、刊行を計画させていた」とあることについて、最後に述べることを約束しておきました。ただ、この戦前における神道大系の計画はとても重要でありますので、私としては日を改めて話したいところですが。

私の日記には、昭和五十年九月三十日(火)午前十時、神社篇の伊豆・箱根・三島の担当を依頼するため、萩原龍夫氏に会ったと記してあり、その時、同氏より国民精神文化研究所神道大系課における「神道大系」編纂に関係するかなりの資料をいただきました。

当時、萩原氏は同研究所の嘱託として神道大系委員の打合せ会などにも出席しておられ、後掲するように、論説篇の「慈遍集」の編纂を担当することになっていました。ちなみに西田先生も同じく嘱託であり、註釈篇の「釋日本紀」を担当とあります。なお、この時代の萩原氏と神道大系編纂事業の関係については大東敬明君の「萩原龍夫の二十代―国民精神文化研究所・教学錬成所の活動に注目して―」¹⁰⁾が参考になります。

そのようなことで、萩原氏は同研究所内に設置された神道大系課に属し、神道大系委員会にも出席されていたので、いただいた資料はいずれも貴重なものであります。ただ、それらのすべてを紹介する時間はありません。今後、これらを整理して、戦前における神道大系編纂事業がどのようなものであったかをまとめておきたいと思っています。

そもそも神道の諸文献をあつめ、それらを体系的に編纂して、出来るだけ多くの人々が利用できるようにと刊行することは、すでに指摘されているように、昭和二年の井上哲次郎博士の「『神道大藏経』編纂の必要に就いて」「再び『神道大藏経』編纂の必要に就いて」¹¹⁾などにも見られるところです。これは「大藏経」とあるように恐らく大正十三年から出版された「大正新脩大藏経」や大正十二年に起こった関東大震災を意識しているようにも思われます。

大東君が「宮地が神道大系の編纂を政府に働きかけたのは、関東大震災で多くの資料が失われたことも関連してい

るであろう」と述べているのに同感です。さらに、このような宮地博士のお考えは国民精神文化研究所の『神道大系』編纂・刊行計画の場合にも継承されたと思われます。第二次世界大戦の時、連合国軍が日本本土空襲を行い、多くの神道関係の貴重書が灰燼に帰したことは事実であり、それゆえ、一日も早い神道大系の刊行を望まれていたと思われます。そのことは虎尾俊哉博士が「今次大戦中、写本のみで伝えられていることの多い神道や神社関係の典籍が、戦災の厄にあつて湮滅することを怖れた宮地直一博士は、これらを集大成し活字化することによって、後世に伝えるべきことを政府に懇請された¹²⁾」といわれる通りです。

また、大東君は、教学錬成所における神道大系の編纂事業は、宮地博士が当時の伊東延吉所長に持ちかけて創められたものであり、第一期として百冊の刊行が企画されていたと述べています。志田延義氏は昭和十七年一月二十七日に「神道大系編纂委員を命ずる」との辞令を受けており、もう一つは、同年二月十六日に三笠宮崇仁親王殿下、閑院宮春仁王殿下及び両妃が同研究所を訪れた際に用意した「三笠宮崇仁親王殿下 閑院宮春仁王殿下 台湾国民精神文化資料目録」であります。このなかに「神道大系編纂関係資料」を掲げ、「説明者 河野省三」と見えていることでもあります。この時に展示したのは、第一篇の古典篇として古事記・日本書紀であり、第二篇の論説篇として度会神道・吉田神道・垂加神道・復古神道でありました¹³⁾。

そこで手許にある資料により、順序立てて述べてみますと、第一回、第二回の神道大系委員の会議録は、残念ながら見つかりませんが、「第三回 神道大系委員打合せ會 昭和十八年二月十五日十三時 於所長室」（全三枚、謄写版刷）という記録があり、そのなかに志田延義所員が「昨年（○昭和十七年）十二月十六日二所内関係者ノ打合せ會ノ席上問題トナリマシタ事項ニツイテ申上ゲマス」と述べていますから、第二回の神道大系委員打合せ會は昭和十七年十二月十六日に開かれたことがわかります。

それはともかく、第三回目の出席者は、研究所内から、橋田（○邦彦）所長・紀平（○正美）部長・志田（○延義）所員・山本（○鏡）所員・河野（○国雄カ）嘱託・萩原（○龍夫）嘱託・西田（○長男）嘱託、これに外部から河野（○省三）・佐伯（○有義）・星野（○輝興）・宮地（○直一）の各委員が加わって開かれています。当時の神道大系編纂委員会の雰囲気伝わってくる貴重な内容なので、全文を資料（6）に掲げておくことにいたします。

この会議で、編纂の分担のことが語られています。それについては「神道大系編纂委員会報告並ニ協議事項」という記録があり、研究所内に「神道大系課」を設置したことが記されており、続いて「首篇並ニ古典篇編集方針及分担案」「原稿作成二関スル打合」「書籍体裁規定案」などがあり、詳しい「編纂分担案」を記しています。興味を惹かれますので参考までに掲げておきます。

編纂分担案

○歴代御製集（首篇）志田、植松、阿部、「神宮に納められた櫻町天皇、光格天皇の御和歌が、御殿にあつたのを下げした。謹写本儀式課にあり。神宮では他見を憚るものと傳へてゐる。御題は種々あり、他の方と御一緒のものもある。玉津島神社、水無瀬神社には御奉納のものがあつて、出したものもある」（○萩原氏のメモ）

○古事記校本（古典篇）植松、「寛永本を台とする」（○萩原氏のメモ）

○日本書紀校異（同）阿部、

○古語拾遺・新撰姓氏録（同）河野（省）、

○令義解・令集解（同）佐伯、

○延喜式（同）梅田（○義彦）、「雲州板、そのまゝ、そつくりならともかく、之を台に用ふるはまづい。町屋板の方がいゝらしい。神名帳、祝詞式はきりはなした方がいゝ。（宮地氏）」（○萩原氏のメモ）

○新撰亀相記・天書（同）宮地、

○神宮篇中ノ一冊（神宮の総記の如きもの）阪本、

○恒例公事録・臨時公事録（朝儀祭祀篇）星野、「全部でなければ交渉がしよい」（○萩原氏のメモ）

○慈遍集（論説篇）萩原、

○闇齋集（同）山本（饒）、

○信淵集（同）同、

○吉川神道集（同）河野（國）、

○釋日本紀（註釈篇）西田、

次に「神道大系編纂委員会、第四回（昭和十九年カ）一月二十六日午前十時」（全三枚、謄写版刷）という記録が注目されます。参加者は橋田所長、宮地委員、河野委員、佐伯委員、久松委員、新関教学部主任、黒川調査部主任、志水指導部主任、増田調査部副主任、野村文献編纂委員、中村文献編纂委員、萩原文献編纂委員、太田調査部勤務、菅谷調査部勤務、山下調査部勤務、大谷（徳馬）囑託、藤田、関口であり、これに関しては鎌田純一氏が全文を紹介している¹⁵ので、すべてはそれに譲ることにします。ただ、鎌田氏は最後の一枚が欠如している資料を用いられたため「（下略）」としていますが、その部分はずか四行であるので、ここに補足しておきます。それは「之れを利用すればよい。黒川調査主任 フィルムが中々手に入り難いであらう。それでは次回までに書目を刷って皆さんに配布致しますから、どれを先にやるか次回に選定することにして今日の會を閉ぢます。以上」です。

そして刷りあがったのが「昭和二十年三月刷、神道大系所収参考書目集、教学鍊成所調査部¹⁶」であります。

これは謄写版刷りの袋綴、五十八丁から成る冊子で、最初に「神道大系編纂計画案」とあり、「一、首篇・二、古

典篇・三、朝儀祭祀篇・四、神宮篇・五、神社篇・六、論説篇・七、注釈篇(省)・八、文学篇(省)・九、制度沿革篇・十、総記篇(省)と記してあります。つまり注釈篇、文学篇、総記篇は略されていますが、この度の『神道大系』全百二十巻・『統神道大系』全五十巻の書目選定に、この「神道大系所収参考書目集」が大いに役だったのであり、今後は両者を詳しく比較して「統々神道大系」の刊行が望まれるところです。例えば、個人の関心事からいえば、論説篇の法華神道関係の書目が、このたびの『神道大系』『統神道大系』には収められなかったのは遺憾です。

また、終戦の年の昭和二十年五月九日に、調査部から出された神道大系関係委員各位宛の記録には

一、別冊(1)編纂委員會記録

(2)所収参考書目案(二部)差上げます。

二、参考書目案は、一部は御手許へ、他の一部は、

(イ)所載以外に氣附の物あらば御記入願ひたく、

(ロ)又各書に就き底本とすべきもの及び善本又は参照を要する者等、御氣附きの者あらば、書目の下又は左側

にその所在を御記入願ひます。

(ハ)六月十五日までに、右二項御取計ひ置き下され度、時局柄当分會議開催も困難につき、同日以後、所員頂戴に伺ひます。

三、特に論説篇につき、直ちに着手可能な者を御指示願ひたく、

其他御氣附の点は、随時御申聞下さい。

第二項につき所内各位へ御願ひ

参考書目案は、印刷部数少なき為、所内関係各位へは、一冊だけ差上げますから、第二項の御記入は調査部

備付の一冊へ六月十五日までにお済ませ下さい。

とあります。とくに「時局柄当分会議開催も困難につき」とありますように、緊迫した情勢が伝わってきますし、神道大系編纂委員会は、これで中止したものと思われれます。

ちなみに、「神道大系体裁規準要領」によると、判はA5判、表紙の装幀はクロース、背文字は「神道大系」とすること、さらに扉・巻頭図版・研究所序・目次・解説・凡例・本文・付録・奥付・大系既刊目録などの基準も記してありますが、これらの詳細は省略します。

このように戦時中ではありましたが、教学錬成所において神道大系は刊行に向けて着々と準備が進められていたことがわかります。しかし、昭和二十年十二月十五日、GHQから「神道指令」が発せられるなどにより、神道大系の編纂、刊行は中止されたのであります。

おわりに

松下翁の強い憂国の思いにより始まった神道大系の編纂、刊行の事業は西田先生、そして松下翁の亡き後も変わる事なく、三十余年の長きにわたり続けられました。畏友眞壁俊信君が中心となり、秋山一実氏などの協力も得て、平成六年十月には『神道大系』全百二十巻と『総目録』が完成し、引き続き、平成十九年三月には『続神道大系』全五十巻と『総目録』が完成し、何と合計百七十二巻の一大叢書となりました。このほかに『神道大系月刊合本（上・中・下）』、『神道古典研究所紀要合本（上・中・下）』、『（財）神道大系編纂会 記念誌』も刊行されております。

いうまでもなく、このような一大事業は、大勢の人々の協力が必要とするのであり、編集に関わった研究者は四百人以上、また校正や印刷の方々まで加えると、六百人以上の人々が関わったと聞いております。

ただ、残念なのは、松下翁が切望されていた神道教養叢書にふれることなく、編纂会が解散したことです。今日の私の話は編纂会設立に至るまでの裏街道のような話に終わりました。これでは皆さまからお叱りを受けることになると思います。なお、設立後の表街道のことは『記念誌』に詳記されていますので、すべてはそれに譲ることにして、この辺で私の下手の長談義を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

注

- (1) 大野健雄「神道大系百二十卷刊行経過報告」(『財』神道大系編纂会 記念誌 神道大系編纂会編、平成二十年九月、四十二頁)。
- (2) この二篇とは「妣ははの国・孀すまの国―推古期美術の民族宗教的モチーフ―」と「葉師の浄土―白鳳期美術の民族宗教的モチーフ―」であり、ともに西田先生の学位論文の中心となった論文である。
- (3) 詳しくは、星原大輔「秋山大と大倉精神文化研究所」(『大倉山論集』本輯所収)を参照。
- (4) これらの論文の題名などの詳細は、三橋健・河田烈編「西田長男博士業績・著作論文一覽」(『神道及び神道史―西田長男博士追悼論文集―』國學院大學神道史学会編、名著普及会、昭和六十二年六月、六三九〜六七〇頁)を参照。
- (5) 詳しくは、岡本準水「古事記に結ばれて―西田先生の想い出―」(『神道及び神道史―西田長男博士追悼論文集―』、六一三〜六一八頁)を参照。
- (6) 鎌田純一「統神道大系について」(『神道古典研究所紀要』第二号、平成八年三月、財団法人神道大系編纂会神道古典研究所、六頁)。
- (7) 西田長男「わたくしの半生」(『神道及び神道史―西田長男博士追悼論文集―』、五九九〜六〇四頁)。
- (8) 岡田莊司「神道大系と西田長男博士」(『財』神道大系編纂会 記念誌、十九〜二十二頁)。
- (9) 鎌田純一「統神道大系について」(『神道古典研究所紀要』第二号、一頁)。
- (10) 詳しくは、大東敬明「萩原龍夫の二十代―国民精神文化研究所・教学錬成所の活動に注目して―」(『國學院大學研究開発推

- 進セクター紀要』七号、平成二十五年三月）を参照。
- (11) 井上哲次郎「『神道大藏経』編纂の必要に就いて」再び『神道大藏経』編纂の必要に就いて」など。これらとともに、鳥蘭進・磯前順一編纂・鳥蘭進・磯前順一・高橋原解説『井上哲次郎集』第九卷（シリーズ日本の宗教学2、クレス出版、平成十五年）に所収。
- (12) 虎尾俊哉「『神道大系』の学術的意義」（『記念誌』七十三〜七十四頁）。
- (13) 詳しくは、志田延義「神道大系編纂の前史と神楽歌の淵源」（『神道大系月報』八五、平成元年三月）を参照。
- (14) 書目の詳細は「三笠宮崇仁親王殿下 閑院宮春仁王殿下 台湾国民精神文化資料目録」（『國民精神文化』第八卷・第四号、四〇六〜四〇九頁）を参照。
- (15) 鎌田純一「統神道大系について」（『神道古典研究所紀要』第二号、二〜五頁）。
- (16) 昭和十八年十一月一日、国民精神文化研究所と国民錬成所（昭和十七年設置）を合併して教学錬成所となったが、同所は昭和二十年十月十五日に廃止された。

【編者付記】 本稿は、平成二十八年五月二十一日の大倉山講演会における「松下幸之助と神道大系の編纂」と題した講演の記録を基に、加筆訂正を加えて成稿していただいたものである。

資料

資料(1)「神道大系」編纂・刊行の趣意

松下幸之助「日本古来の伝統精神を求めて」(「刊行のことば」)

戦後三十余年。あの荒廃した国土のなから立ち上がって、お互い日本人は見事に経済的復興をなしとげ、アメリカ、西ドイツとともに、自由主義諸国におけるリーダーとしての榮譽ある責任を求められるまでになりました。その偉業は、まさに世界の驚嘆するところでありますが、かえりみてその精神的復興、再建を考えますとき、今日、お互いに世界の師表として誇るべき姿になっているとは決して言えないのであります。

その原因はいろいろありましようが、根本的には、二千年の歴史と伝統に育まれた日本人本来のすぐれた精神的基盤を見失っているところにあると思います。日本人がその本来の姿を見失って、真に世界に貢献するということはできません。まして、来るべき二十一世紀を目ざして、物心ともに世界の繁栄に寄与することを念願するとき、私どもは、長い歴史のうちに先人が創造してきた貴重な精神的遺産を、もう一度、根底から見直すことが、何よりも大切であると思います。なかでも神道と呼ばれるものは、日本人固有の精神的所産であり、日本人としてのいわば魂の原点がここにひそんでいるとも言えましよう。

思えば、東洋思想の根源になってきているものをみると、儒教には古来おびただしい幾多の叢書類がありますし、仏教にも『大藏経』があり、また道教にも『道藏』というものがあります。しかるに、神道には、まことに残念ながらこうした永遠に残る研究著作の大集成がなされてこなかったのです。日本の国として、また日本人として、これはまことに遺憾なことで、いつかは誰かが手をそめなければならぬことであります。

その意味において、かつて文部省においては、政府事業として、国民精神文化研究所に「神道大系」の編纂、刊行

を計画させていたのですが、敗戦の混乱とともにそれが中断され、再建の機もないまま今日に立ち至ってしまいました。まことに惜しむべきことであります。

ここに私どもが微力をもかえりみず、あえて「神道大系」の編纂、刊行を発意いたしましたのは、これ以上放置していたのでは、日本の将来にもかわることを憂慮したからであります。したがって、主としてさきの政府事業による計画案にもとづき、それに多少の修訂を加え、時代の進運にも適合するようにしたのですが、これはいわば国家のなすべき事業を、民間有志の手によって行おうとするものであります。それだけに、容易ならぬ事業であることが痛感されますが、どうかこの規模雄大な国民的一大事業が、子々孫々にわたる国家百年の計として、見事完遂されますよう、私どもの意のあるところをおくみとり頂き、各位の格別のご理解と特別のご協力を心からお願いしてやまない次第であります。

財団法人 神道大系編纂会

会長 松下幸之助

資料(2) 西島一郎『随想 恵まれたふれあい』「神道大系」(四十四〜四十九頁)

東洋と西欧とでは、生活・風習をはじめとして、ものの考え方が根本的に違うところがあります。東洋の思想の^々も^々には、儒教や、道教や、仏教などがあつて、四書五経とか、道藏とか、大藏経などの^々根本を述べた書^々があります。ところが日本には、日本独得のものである「神道」がありながら、^々神道の根本を述べた書^々がありません。かつて、文部省においては政府の事業として、国民精神文化研究所にその大系を編纂する^々もくるみ^々をもっていました。けれども、戦争の混乱に中絶されてしまいました。私の恩師、國學院大学教授の西田長男博士は、この「神

道大系の構想」を、ちゃんと整えていました。神道・神学・古典・儀祭・神宮・神社・神道論説・神道文学などと、百二十編にわたる膨大なものです。

「日本精神の根源を明かにする神道文献だがね。日本中の関係学者に執筆を依頼しなければならない世紀の大事業だが、金がないからねえ。」

と、西田博士は、まとまった構想を前にしてつぶやきました。

「松下幸之助さんに、お話ししてみられてはどうですか？」

私は咄嗟にそう言いました。日本精神の真髄をまとめあげるその壮举の計画に胸をうたれたからです。

「松下さんが？まさか、会ってもくれないよ。」「当たって砕けろーと、いうこともあります。」

父（○西島好夫、六十二代、三重県会議長、昭和四十四年五月～四十五年五月）は、松下幸之助さんに親しくしていただき、神宮崇敬会の関係で伊勢にお越しになると、家にも立ち寄りられ、いろいろな機縁で私も可愛いがつていただいています。

苦学力行された松下さんは、誰でも知っているように常人ではありません。その眼は世界中を見つめられ、識見は広く、また敬神崇祖の念は極めて篤いお方です。宮中であって見聞したお話などを申しあげると、襟を正し肅然として聞いてくださいます。（○西島君は宮内庁掌典職として勤務、七年間、皇居賢所に奉仕したが、その間、松下翁と父君を皇居賢所に案内している。皇居賢所において三人で撮影した記念写真が『随想 恵まれたふれあい』五十頁に掲載してある。ちなみに、私も西島君に皇居賢所を案内してもらったことが思い出される）

私は、密かに松下幸之助さんが共鳴してくださることを信じました。

恩師、西田博士と、敬仰する松下幸之助さんとの会見となりました。仏の教えを受けるのは、聞く側の機根と聞く

べき因縁とよるといふ「機縁」といふ仏語がありますが、西田博士と松下幸之助さんの機縁は、まことに不思議です。

「戦後、日本は世界の驚嘆するばかりに発展を遂げました。が、世界の師表となるにはあまりにも精神的に貧困です。日本古来の伝統の精神に目覚めるならば、世界の人々も日本人を信頼するようになりましょう。その、根本となる「神道の大系」を整えたいのです。」

と、博士は、声涙あふれる情熱を披瀝しました。

じっと、耳を澄まして松下幸之助翁はお聞きになっていらっしやいました。

「やってください。ご援助しましょう。」

松下さんのこの一声に、西田博士は啞然としました。

しばらく言葉ありません。松下さんが、これからの日本人の魂にひびく仕事であればと、こころよく引き受けて下さったことに対して、博士は汲めどもつきない感動をもたれたのでしょう。

博士の頬は紅潮していました。

会長松下幸之助・副会長東京大学名誉教授坂本太郎・常務理事國學院大学教授西田長男をはじめとする斯道学界の権威百名ばかりの錚錚たる編纂委員が揃い、執筆を開始されました。

全百二十巻、規模雄大は、まさに世紀の国民的叢書「神道大系」は、着々と刊行され、すでに二十数巻に及んでいます。

題字松下幸之助「神道大系」のこの叢書は、菊版・上製・函入、一冊五百ページを超える素晴らしいのですが、刊行完了までに十数年の歳月を要します。私も、編纂委員のひとりとして、また執筆者のひとりとしてメンバーに参画

させてもらっています。

刊行半ばにして、西田博士は逝われました。

博士が亡くなられてから、しばらくして奥さまが、博士の遺稿の中の神道大系に関する一章を語られました。

「松下幸之助氏への橋渡し役としてお願いし、その原動力となった西島一郎君なくては、神道大系はあり得ないの
である。心から感謝している。と、書いておりますのよ」
と。

この、遺稿に書きとどめておかれた一章を、ふと思い浮かべると、博士が生きて語っていられるような気がしてな
りません。

資料(3) 村田正志博士「松下文庫構想私案」

範を東洋文庫にとる

事業内容左記の如し

1. 神道大系の編集刊行 第一期六冊
範を群書類従・大日本仏教全書にとる
2. 国体、神道、国史、国語、国文等各方面にわたる。
研究を紀要として刊行(百ページから百五十ページ)
3. 重要な文献資料の原本の複製
4. 図書文献の蒐集 写真、影写、謄写も、

5. 解説目録の編成、カードによる目録も、
6. 後進学徒の養成

さし当たったの業務

1. 金沢文庫、真福寺所蔵本のフィルム撮影
2. カード目録の作成
3. 神道大系の出来るものから原稿作成
4. 事務室の設定、事務員の依嘱
5. 原稿用紙、カードの購入
6. 主要メンバーの集合曜日設定

資料(4)「神道大系編纂計画案 全百四十一卷」(八枚、ただし、校注者名は省略)

○巻頭に松下会長の序文を記載する(これは『古事記』「神道大系月報」1に「刊行のことば」として掲載された。昭和五十二年十二月)

【一】首篇 全二卷

- (1) 古今神学類編(上)
- (2) 古今神学類編(下)

【二】古典篇 全十卷

- (1) 古事記(古事記裏記その他)

- (2) 日本書紀(上)
 - (3) 日本書紀(下)
 - (4) 古語拾遺(注釈書を含む)・新撰姓氏録(逸文を含む、栗田寛の注釈書なども入れるか)
 - (5) 風土記(逸文はもとより大嘗会風土記や偽撰の惣国風土記の類なども網羅すること)
 - (6) 先代旧事本紀
 - (7) 令集解(近江令・淨御原令・大宝令の逸文とも対照せしめる必要あり)
 - (8) 延喜式(上)
 - (9) 延喜式(下)(弘仁式・貞観式などの逸文とも対照せしめる必要あり)
 - (10) 天書・神別記・大和本記・新撰龜相記・高橋氏文・丹生祝氏文・丹生大明神告門・住吉神社神代記・中臣宮
 処氏本系帳・大中臣氏本系帳・多米宿禰本系帳・粟鹿大神元記・海部系図(二本)・伊福部系図(二本)・松
 尾社家伊岐氏系図・賀茂県主古系図・伊曾乃神社新居系図・三井寺円珍系図・翰苑(これらには本居太平・
 伴信友等の註釈書を入れる必要があるかもしれない。皇大神宮禰宜譜図帳・祭主補任(宮内庁)などは神宮
 扁に入れる。真偽未詳のものも多いが、これらはそれぞれに歴史的産物であるから、本系帳ではすべて採取
 する方針をとりたい。神宮扁に系図部もあること。要するに五百頁以上になるように編輯すること)
- 【三】朝儀祭祀篇 全五卷
- (1) 儀式(貞観儀式)・延喜儀式・内裏式、
 - (2) 西宮記・北山抄・江次第、
 - (3) 踐祚大嘗祭(荷田在満の著作も加えるが便宜ならん)、

(4) 恒例祭祀・年中行事、

(5) 神祇官に関するもの。宮中諸神に関するもの（敷田年治「官故」、佐伯有義「神祇官考証」も加えるが便宜ならん）

【四】神宮篇 全五卷

(1) 総記（両宮の儀式帳をはじめ雑例集など全般に関するもの。殿舎・付属官社に関するもの。祭神に関するもの。）

(2) 祭祀・奉幣・修祓・禁忌（建中年中行事、神宮明治祭式）

(3) 遷宮

(4) 神領・祠職・参詣（神宮雜書・神鳳抄・給人引付・大神宮禰宜譜図帳・宮内庁の新出史料である祭主補任）

(5) 文書・記録（鑰矢記）

【五】神社篇 全五十六卷（室町以前のは網羅する方針をとる）

(1) 総記（一） 神名記（神名帳の訓みを示したもので。内閣文庫）・国内神名帳（戒壇院公用神名帳の類も入れる）・式外諸所神名帳・二十二社記・一宮・総社

(2) 総記（二） 吉田家所蔵神祇官文書・神祇官勸文・伊呂波字類抄諸社の部抜粹・諸社根元記（諸神記）

(3) 総記（三） 慈円夢記・諸社功能・元要記・神祇講式（諸社の講式はその神社の部に入れる）

(4) 総記（四） 神祇宝典（付、神祇正宗）・大日本神祇志

(5) 総記（五） 神社啓蒙・神社便覧・本朝諸社一覽・百社起源・百社起源統帳・和歌三神考・夷子大黒弁・蕃神考

注：〔6〕系図 神代系図（田中本）・賀茂総系図・千家北島系譜・石清水祠官系図・田中坊絵系図・日吉

祝部系図・若狭彦絵系図・卜部系譜・熊野檢校歴代を掲げたが、削除することになる」

(6) 五畿内 (一) 宮中及び山城国のもの (二冊にわたる。京中神も入れる)、はじめに式内神社考 (畿内、白井雅胤)・洛陽十二社靈驗記などの総記的なものを収める。清瀧権現講式・五社権現講式・愛宕縁起・熊野山祠縁起並愛徳山申次第・粟田天王社感心院新宮縁起・松尾・梅宮・吉田・後鳥羽院御靈記・離宮八幡宮文書・松尾社浜松庄立卷文

(7) 五畿内 (二)

(8) 五畿内 (三) 大和国のもの (二冊にする。以下、総記的なものをはじめに掲げる)、大和国五部神社名帳註解、石上・大倭など。

(9) 五畿内 (四)

(10) 五畿内 (五) 河内・和泉・摂津国の三国のもの、大鳥神社流記帳・大鳥神社古縁起・新縁起

(11) 五畿内別冊 (一) 石清水① 宮寺縁事抄

(12) 五畿内別冊 (二) 石清水② 八幡愚童訓・八幡宮寺巡拜記・延久四年石清水庄園文書

(13) 五畿内別冊 (三) 賀茂下上

(14) 五畿内別冊 (四) 稲荷 (諸国の稲荷史料をも併載)

(15) 五畿内別冊 (五) 八坂 (祇園) (津島その他の祇園関係のものも収める)、祇園執行日記

(16) 五畿内別冊 (六) 北野 両聖記・荏柄本・猪熊本管家伝

(17) 五畿内別冊 (七) 大神 (三輪)

(18) 五畿内別冊 (八) 春日

- (19) 五畿内別冊(九) 住吉(諸国の住吉史料をも収める)
- (20) 伊賀・伊勢・志摩国、多度神宮寺伽藍縁起並資財帳
- (21) 尾張・参河・遠江国
- (22) 駿河・伊豆・甲斐・相模国、鎌倉宮造記
- (23) 武蔵・安房・上総・下総・常陸国
- (24) 富士山(浅間関係のもの)
- (25) 熱田
- (26) 鶴岡(関係のものも収める)
- (27) 伊豆・筥根・三島
- (28) 香取・鹿島
- (29) 近江・美濃・飛騨国
- (30) 信濃・上野・下野国、生島足島神社文書
- (31) 陸奥・出羽国
- (32) 日吉、山王靈験記
- (33) 諏訪
- (34) 日光、日光東照宮造宮帳・東照宮縁起・日光山瀧尾建立草創日記(二荒山のものをも合併するか)
- (35) 鹽竈
- (36) 出羽三山

- (37) 若狭・越前・加賀・能登国、氣比神宮縁起
- (38) 越中・越後・佐渡国
- (39) 白山、白山神社古記録・泰澄和尚伝
- (40) 出雲・石見・隱岐国、日御碕社勸進状及勸進
- (41) 丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆国、名和神社文書
- (42) 出雲大社（熊野大社、神魂社などの関係の神社史料をも収める）
- (43) 播磨・美作・備前・備中・備後国
- (44) 長門・安芸・周防国
- (45) 嚴島、御判物帖
- (46) 紀伊・淡路・阿波国
- (47) 讃岐・伊予・土佐国
- (48) 熊野三山
- (49) 大山積（三島）・金刀比羅
- (50) 筑前・筑後・豊前・豊後国、高良山のもの、菊池神社蒙古襲来絵図
- (51) 肥前・肥後・日向・薩摩・沓岐・対馬国
- (52) 宇佐・筥崎（これに八幡宮関係のものを類聚）、対馬記（二本）・正八幡記文・八幡宇佐宮御託宣記・赤幡坊記・筥崎宮神宝記及裏文書・敵国降伏宸翰
- (53) 宗像、宗像神社文書

(54) 太宰府（諸国の天神関係のものも併わせ掲げる）安楽寺草創日記

(55) 阿蘇・英彦山

(56) 沖繩・北海道、琉球神道記

【六】註釈篇（十卷）

(1) （本居宣長以前の古事記の註釈書）

(2) 仮名日本紀・信西の註・兼敦の註・歌学者の日本紀の和歌古註・神代六首和歌抄・兼俱以下の卜部家の古註

(3) 釈日本紀

(4) 神祇令の精密な校訂本とその註釈書

(5) 延喜式祝詞の精密な校訂本（國學院の兼永・兼右本をも参考）とその註釈書、伝後醍醐天皇木像厨子貼込祝詞・詔戸次第・氣比の初卯祭祝詞

(6) 式神名帳の精密な校訂本・伴信友の考証・黒川春村の神名帳考証土代附考

(7) 古語拾遺の註釈書、池辺真榛のものかどうか

(8) 中臣祓の代表的な本文二、三、慶長勅版中臣祓・中臣祓の古註・中臣祓記解・中臣祓義解・中臣祓訓解・伊勢系及び卜部系の中臣祓の古註釈・江戸時代の中臣祓の註釈の主なもの

(9) 旧事紀、御巫清直、栗田寛のもの

(10) 新撰姓氏録考証

【七】祭礼行事篇（五卷）

(1) 原田敏明氏の『祭礼行事集成』参照、なるべく室町以前ものを集めること

- (2) 原田敏明氏の『祭礼行事集成』参照、猿投年中行事
- (3) 原田敏明氏の『祭礼行事集成』参照
- (4) 宮座のもの、猿投八講帳・塔寺八幡長帳
- (5) 大和の宮座のもの

【八】論説編(四十二卷)

- (1) 真言神道① 三輪神道は大神神社の部に入れること、麗氣記・麗氣府録・麗氣第一聞書・麗氣聞書・麗氣制作抄・鹿米抄・麗氣記私抄・麗氣記拾遺抄
- (2) 真言神道② 神祇秘抄・神口決・鼻飯書・大元神一秘書・伊勢内宮・諸別宮・神口決・大日本開闢本縁神祇秘抄・春秋曆・両部神道印信集
- (3) 天台神道、山王神道、山王一実神道、三井寺関係のもの
- (4) 法華神道、浄土系(浄土宗・真宗・時宗)、禅系統その他の仏家神道、三教一致説
- (5) 雲伝神道、両部唯一神道
- (6) 伊勢神道① 五部書・八部書、行忠、常昌、内宮側の伝書
- (7) 伊勢神道② 家行、親房、慈遍、内外両宮の祠官のもの
- (8) 伊勢神道③ 後期のもの、延佳、延経、常彰、荒木田氏のもの
- (9) 一条兼良(纂疏補遺あり)、忌部正通
- (10) 卜部神道① 兼文(天野社勘文・中宮寺曼荼羅など)・宮主秘事口伝抄・兼俱のもの・神道大意(歴代のものとその註釈書)・唯一神道名法要集(その註釈書)

- (11) 卜部神道② 行事書・葬祭次第・御許物案・諸祓・六根清浄大祓・三社託宣（その註釈書）
- (12) 卜部神道③ 兼永・宣賢・兼右などの作物
- (13) 卜部神道④ 吉田家日記
- (14) 卜部神道⑤ 吉田家日記
- (15) 吉川神道① 津軽家の伝書を中心とする
- (16) 吉川神道② 保科正之の会津神道を付載
- (17) 垂加神道① 山崎闇斎
- (18) 垂加神道② 正親町公通・鴨祐之・大山為起・玉木正英・跡部良顕
- (19) 垂加神道③ 若林強斎・吉見幸和・谷川土清など
- (20) 儒家神道① 惺窩・羅山（林家の後の人も加える）
- (21) 儒家神道② 藤樹・蕃山・素行・白石
- (22) 儒家神道③ その他の人々
- (23) 水戸学神道
- (24) 伯家神道① 伯家部類
- (25) 伯家神道②
- (26) 陰陽道神道
- (27) 修験道
- (28) 物部神道① 旧事大成聖

- (29) 物部神道②
 - (30) 諸家神道① 烏伝神道・桂神道(多田義俊)
 - (31) 諸家神道② 増穂残口、その関係のもの
 - (32) 諸家神道③ 心学・二宮尊徳・玉田永教・中林成昌など
 - (33) 復古神道① 契冲・東満・真淵
 - (34) 復古神道② 宣長 直毘霊・三大考などの論争を主として集成すること
 - (35) 復古神道③ 篤胤
 - (36) 復古神道④ 守部・重胤・隆正
 - (37) 復古神道⑤ その他の人々、玄道・重石丸・美静など
 - (38) 教派神道① 天理教
 - (39) 教派神道② 金光教
 - (40) 教派神道③ 黒住教
 - (41) 教派神道④
 - (42) 教派神道⑤
- 【九】文学編(三卷)
- (1) 神道集・神祇雑々・本地物
 - (2) 神道和歌・和歌秘伝・能の秘伝・大嘗会和歌・やすらい歌・忌宮神社法楽和歌・熊野懐紙・北野社連歌・琴平宮・開口神社広沢切(伏見天皇歌集)

(3) 参詣記・定家熊野詣記・随筆

【十】法制篇(三卷)

- (1) 三代格(神社・神封の部)、新抄格勅符抄・社社定書・諸社禁忌・触穢問答・諸社御朱印写
- (2) 明治のもの。教部省布告全書・社寺例規類纂・社寺宗教規則・社寺取調類纂・社寺雑事録より抜粋
- (3) 大教宣布運動関係書

資料(5)「神道大系編纂会設立趣意書」(○)『記念誌』は「財団法人『神道大系編纂会』設立趣意書」

わが国は建国以来二千有余年に及ぶ歴史を通じ、世界に類のない独自の精神文化を作りあげてまいりました。その間、様々な危機に遭遇しながら、それを乗り越え、今日の繁栄を見るにいたっておりますのも、日本人としてすぐれた伝統的精神が源泉となったものと思われまます。この様にすぐれた伝統的な日本文化の発展は、陰に陽に外国から受け入れた数々の思想や文化の影響もありますが、それらを吸収消化し、独自の精神文化を形成した背景の一つには、日本古来の思想が大きく貢献したものと考えられます。

こうした長い歴史の中で今日まで培われてきた日本の精神文化に関して、断片的な記録は存在しませんが、学的・歴史的に大系づけられた研究は未だに行われておらず、かつて、昭和十八年から十九年にわたり、東京帝国大学教授・宮地直一博士を中心に、当時の内務省神社局考査官(○)『記念誌』は「神祇院考証官」に作る)・坂本(○)『記念誌』は「阪本」に作る。この方が正しい)広太郎博士(○)『記念誌』は「広太郎氏」に作る)をはじめ、神道界權威の諸先生方が参画し、この研究編纂に着手されようとしたもの、残念ながら、終戦を迎え、更に戦後の混乱した情勢により、同事業も中断のやむなきにいたしました。当時この企画に参画された学者及び関係者は、今日ほとんど

故人となつておられますが、かつて故宮地博士に師事されていた現国学院大学教授 西田長男博士の手許には当時蒐集された貴重な資料が数多く現在も保存されております。

今般、この貴重な資料をもとに、国家的な不朽の大事業として、十ヶ年計画のもとに、「神道学界・神社関係者の専門書として、」(○)『記念誌』は「日本古来の神道文献を学術的に編纂大成し」に作る)「神道大系」全百八巻の編纂刊行を実現したいと思います。

この実現は、「旧来から強く望まれていた」(○)『記念誌』なし)神道学界・神社関係各位「のみならず広く学界」(○)『記念誌』の強い「願望」(○)『記念誌』は「期待」に作る)に込めることができると信じます。

又、一般国民に神道のみならず、日本古来の伝統精神と文化を、親しみやすく、より理解されることの必要性を痛感いたします。一年乃至二年後には一般教養書「神道教養叢書」全五巻も併せて刊行することを目的として、こゝに「財団法人」(○)『記念誌』神道大系編纂会の設立を發起するものであります。

(○)『記念誌』は「昭和五十二年二月二十一日」とあり、以下の六行は削除されている)

- 一、神道大系編纂会の目的
 - (1) 神道大系の編纂
 - (2) 神道教養叢書の刊行
 - (3) 神道文化の調査研究
 - (4) 神道普及に関する行事
 - (5) その他本会の目的を達成するに必要な事業

資料(6) 神道大系委員 第三回會議録(○旧漢字と新漢字が混合して使用されているので、ここでは新漢字に統一した)

第三回 神道大系委員打合せ會

昭和十八年二月十五日十三時 於所長室

出席者

所内 (○橋田) 所長・紀平部長・志田所員・山本所員・河野囑託・萩原囑託・西田囑託

委員 河野・佐伯・星野・宮地委員(イロハ順)

一、所長挨拶

一、志田——昨年十二月十六日二所内関係者ノ打合せ會ノ席上問題トナリマシタ事項ニツイテ申上ゲマス

1・天書・住吉神代卷ヲ何篇ニ入レマスカ

2・編纂順序トシテ、神道大系ノ性質上、先ヅ純粹ナ神道文獻ガ望マシイガ、先日内務省神祇院考證課長ヨリ相談ヲ受ケタ神宮司庁デ出版計画中ノ大神宮叢書ニ収容スル予定デアツタ伊勢神道文獻(中世ノ著述ノ

ミ)ヲ、本所ニ移譲ヲ受ケ、神道大系ノ論說篇ニ加ヘタイト思ヒマスガ如何

3・旧事紀モ古典篇ニ加ヘタイ

4・内閣文庫所藏ノ明治初年ノ神社行政記録ヲ此ノ計画ニ加ヘテ刊行シタイガ、其ノ内容・方法ハ如何シタラ宜シイカ

5・宮内省ノ借覽、最近多摩御陵近クノ防空ヲ顧慮シタ或ル所ニ於イテ閱覽ハ出来ル由デアルガ、尚戰爭中ハ借覽ハ甚ダ難シイコト、思フ

6・祝詞・宣命ヲ加ヘルニ関シテ、御意見ヲ承リタイ

志田——目録ニ関シマシテ、各担任委員ノ考ヘカラ重複・喰違ヒモアルト思ヒマス。又一部整理ノ出来ヌモノハ、次回ニ譲リマス

河野——第五篇ノ年中行事篇ハ、直接神社ニ関係シタモノ多ク、阪本・宮地サンニモ共力御分担願ハネバナラヌ

河野——各篇ノ予定冊数ヲ考慮ニ入レテ、当目録ノ選択ヲ、先ヅ担当員ニ依嘱セネバナラヌ。

所長——選択シタ書目ヲ各篇ニ応ジテ決定スル迄ハ、今迄ノ担当委員ニ頼シ（○「ミ」カ）タイ。ソレニ依ツテ各篇トモ着手シマスカ。

志田——最初ニ古典編ヲ一・二刊行シタイ。又先程説明シタ神宮司庁ノ部、神道関係ノモノヲ早く出シタイ。

各委員——此迄ニ提出サレタ目録類ニツイテ、色々検討サレテモ容易デナイ。大体ノ順序・方法ヲ相談シテ、実行ノ具体策ヲ定メタイ。

神道大系ニ関シテハ其ノ大要ガ社会ニ発表セラレテキルカラ、社会カラ注目ヲヒク古典、シカモ洗練サレタ書物ヲ先ニ出シタイ。

最初刊行ノ重点ヲ古典・神宮、或ハ神社篇ニシテ、コレニ集中セネバナラヌ。古典篇ヲ最初ニ。

所長——同意

星野——首篇ト古典篇ヲ最初ニ出スノガ宜シイ。他ノ篇ニハ、書目ノ選択ニ相当問題ガアル。話ハ少シ違ヒマスガ、目録ノ制度沿革篇中ノ「恒例公事録」「臨時公事録」ハ朝儀祭祀篇ニ移スヲ至当ト思フ。（両書ノ由来説明ヲ省ク）

佐伯——朝儀祭祀篇ニツイテ申上ゲマスガ、朝儀ハ著述デハナク、記録デアリマスカラ選択ハ仲々難シイ。時代ヲ隔

テ、キテモ、同種ノ朝儀ニ関スル記録ハ、自然同内容ノモノトナルハ当前（然）カデ、ソレデハアルガ一方ヲノミ除クコトハ出来ヌ。

所長——重要ナ書物ハ万難ヲ排シテ刊行シマス。筆写ハナカ〜大変デスネ。

佐伯——既刊図書ヲ其儘出スナラ容易ダガ、校定トナリマスト容易ナ業デハアリマセン。校異程度ガ宜シイデセウ。

河野——手ヲ省ク為ニ、モノニ依ツテハ研究家ニ依頼スル方法モアリマス。

所長——ソノ方法モ採用シマス。

紀平——首篇・古典篇二次イデ、目録ノ三（神宮篇）ト六（論説篇）トヲ併行シテ仕事ヲ進メルコトハ、世間ノ評判カラモ必要デセウ。

星野——神宮篇ガ一番手ヲツケヤスイデセウ。（宮地員ニ向ツテ）

宮地——神宮篇ニハ、既刊図書トシテ此ノ目録ニ在ルモノハ、約半数モアリマセウカ。撰定シタラ二五〇〇頁前後トモナルデセウ。

所長——非常ニヨイ申出デ、神宮篇ノ検討ヲ致シマセウカ。

宮地——神宮篇ノ決定ヲシタナラバ、書目ノ決定ヲシタイ。

所長——目録ノ首篇、古典・神宮・論説ノ各篇ヲ、先ヅ実施シタイ。

各委員——同意。

山本——活字ハ五号、一段組トスル方針デス。

佐伯——各冊ノ五百頁トハ、厳密デナク、古典篇ノヤウナモノハ分量ノ多少ニ拘ラズ、一書一冊トシタガ宜シイ。尤モ天書ハ薄過ギルガ。

各委員——出来ルダケ其ノ方法ヲ希望。

志田——古典篇ノ順序ハ編纂サレタ時代順ニヨリ、整理番号ヲ打チマス。

所長——天書ヲ古典篇ニ入レマス。

星野——首篇ノ詔勅ト御製トハ分冊デスカ。

所長——ワケマス。

志田——詔勅ハ全部デナク撰ビマスカ。

佐伯——神祇関係ノモノニ限定シタラ宜シクナイカ。

星野——選択ハ難事デス。全部ガヨイ。御製ハナルベク網羅主義ガヨクナイカ。

紀平——シカシ、花ニ関スルモノ、鳥ニ関スルモノ、類ハ省ク方ガヨイ。

星野——先程志田サンカラ話ノアツタ宣命・祝詞デスガ、宣命ハ宣命デ一本立デヤリマスカ。

宮地——神宮篇ハ阪本君ニ一応検討ヲシテ貰フ必要ガアリマス。

古典篇ニ入レマス旧事紀ニツイテハ、只今ノオ話ノ通り吉田家本ガ古ク、兼永ノ自筆、研究所ヨリ正式ニ依頼ガアレバ、吉田家ノ都合ヲミテ便宜ヲ致シマス。新撰亀相記ハ現在吉田家ノ書庫ニ見当ラス。神道研究室ニ梵舜自筆本ガアリマス。

所長——神宮篇ノ検討ヲ如何様ニシマスカ。

宮地——阪本君ノ出席シテ居ル時ニ。

各委員——神宮司庁ノオ話ノモノヲ急グヨリ、純神道的ナモノヲ先ニ出スベキダ。論説篇デ吉田神道・吉川神道ハ纏リ易イト思フガ。

星野——垂加ハドウデス。

宮地——垂加、吉川ヲ纏メルカ。佐藤氏ノ所有ノ主ナ書物ヲ出シタガヨイ。

宮地・佐伯・西田——津軽家ノモノ、国学院ノモノ、土田氏ノモノ。

所長・山本——垂加・吉川ヲ始メマス。

河野——筆写ノ方法ヲドウシマスカ。

西田——出雲路氏ハ見セテクレマスカ。

宮地——研究所ヨリ正式ニ依頼シ、ソノ方法ニヨツテハ可能デセウ。

志田——神宮司序ヨリノ一件ハ、研究所デ頂イテ宜シイカ。

宮地——結構デス。始メカラ出スノデナク、刊行予定ニ入レテ置ケバヨイ。

垂加神道ハ山崎闇齋ヲ中心ニ、末流ノモノハ除カナケレバ多スギル。

西田——出雲路氏ハ出版ヲ計画中ノ由。

各委員——写字ヲ出来ルダケ早く進メネバナラス。

宮地——書紀ハ佐伯サンノ朝日新聞ノモノヲ根本トシテハ。

佐伯——世間ハ従来ノ刊行書ヲ其儘出シテモ歓迎セヌ。ソレ以上ノモノヲ出スコトニ価値ガアル。

河野——専任ノ所員ヲ置カスト、大仕事ハ順序ヨク運ベマセン。

宮地——神宮ノモノハ当所デ或ル程度相談出来タラ、加藤君ニ依頼スルガヨイ。新撰亀相記ハ引受ケマス。

河野——古語拾遺ヲ引受ケマス。

所長挨拶